

酒井家文書総合調査

第十一回企画展「酒井家文書総合調査」

# 江戸時代人の楽じみ

## 旅・俳句・芝居



徳島県立文書館

平成八年五月五日 日曜日

平成八年一月三十日 火曜日

展示図録目録用



# 酒井家略年譜

和 暦	西 暦	事 項
寛文2年	1662	2代堺屋太兵衛出生。太兵衛は徳島市中佐古7丁目の町人堺屋吉左衛門の嫡子。堺屋善右衛門の弟。弥蔵の曾祖父。
元禄11年	1698	3代堺屋伝兵衛出生。伝兵衛は三好郡東井ノ川村馬場芳右衛門の4男。2代太兵衛の養子となる。
元禄15年	1702	2代太兵衛、父を脇町に置き、半田村へ移住。小野浜で薪を仕入れ、徳島へ運送する店を開く。
宝永元年	1704	初代吉左衛門(堺屋儀六2男)没。
享保11年	1726	4代堺屋孫助出生。孫助は伝兵衛の長男。弥蔵の祖父。
享保16年	1731	2代太兵衛没。行年70歳。
寛延2年	1749	3代伝兵衛没。行年52歳。
宝暦12年	1762	5代堺屋武助出生。武助は孫助の2男。
安永6年	1777	5代武助妻お芳出生。お芳は三好郡足代村金八娘。
文化5年	1808	4月27日、6代堺屋弥蔵、武助・お芳夫婦の長男として出生。
嘉永4年	1851	弥蔵先妻お文没。行年28歳。お文は三好郡太刀野村文七娘。
明治8年	1875	8代酒井茂八出生。茂八は美馬郡三島村三谷の堤松太郎2男。
明治12年	1879	7代酒井悦蔵が妻セキと長女サワを帯同して、弥蔵の養子となる。悦蔵は半田村大坂嘉吉の2男。大坂屋嘉吉は、弥蔵宅の斜め向かいで油・竹・薪を扱う弥蔵の取引先。悦蔵は小野浜で船運送業を営む。
明治25年	1892	旧3月3日、弥蔵没。行年85歳。法号竹岸院占達寿仙居士。
明治31年	1898	弥蔵後妻お台没。行年74歳。お台は半田口山村久保名の亦右衛門娘。
明治34年	1901	茂八、悦蔵の長女サワと婚姻し、8代目を継ぐ。
明治36年	1903	9代酒井武彦(茂八2男)、半田村で出生。後年、武彦は満鉄の技術者となる。
明治43年	1910	酒井鎮男(茂八3男)、清国安東県で出生。後年、鎮男は安東市でおもちゃ屋を営む。
昭和14年	1939	10代酒井一字(鎮男長男)、安東市で出生。
昭和16年	1941	見性寺墓地を整理し、26柱を合葬した後、酒井家歴代之墓を建立。
昭和21年	1946	鎮男一家、中国より半田村小野の実家へ引き揚げる。
昭和22年	1947	武彦夫婦、中国より小野へ引き揚げ、同一敷地内で2家族が住む。
昭和45年	1979	国道192号線新設のため、小野に新家屋建築し、転居。
昭和58年	1983	武彦妻敏子、広島県福山市在住の一字・妻恵子夫婦と養子縁組し、一字が10代目を継ぐ。敏子77歳で没し、以後、半田町の酒井家は空家となる。
平成5年	1993	一字により、半田町の酒井家に保存されていた文書一式が、県立文書館に寄託される。

## 堺屋弥蔵と酒井家

〈文・篠原俊次〉



弥蔵のガラス板写真。木箱の蓋に「明治十二己卯十月五日寫 酒井弥蔵七拾二歳生像」と箱書きされています。(酒井一字氏所蔵)

半田町の酒井家は屋号を堺屋といい、徳島市佐古が発祥の地です。八代酒井茂八が昭和十七年に作成した『酒井家累代年鑑』には「徳島ヨリ脇町ニ移り、更ニ半田村ニ移住ス。于時寛文十二年、初代堺屋吉左衛門」と記されています。天保六年(一八三五)に弥蔵の書いた『堺屋系図』によると、吉左衛門の墓は脇町真福寺に、その妻の墓は佐古の清水寺にあります。少なくとも江戸後期から幕末に至るまでは、佐古と脇町で堺屋の一族が一家を構えていました。

酒井家は半田の小野浜から四ツ橋に至る賑やかな街道沿いに建つ商家でした。小野浜は吉野川の主要な河港、四ツ橋は伊予街道と半田奥山街道が交差する四つ辻でした。家は小野浜港が鳥瞰できる敷地にあり、吉野川の水運を利用し、主に薪を仕入れ、積出しをするには、至便の土地でした。幕末の商圏は徳島、美馬・三好、中讃、西讃に及んでいました。

弥蔵は農業や家伝薬の製造にもいそしみ、易学にも長じていたので、断を乞う者が遠近から集まりました。その合間に旅に出、芝居を楽しみ、俳諧や心学に傾倒し、写本や刊本を収集愛蔵しました。

春耕園農圃、五養亭長和房と号し、家隆を名乗った弥蔵は文才があり、記憶力に優れ、向学心と好奇心に富んだ人でした。また、とても几

帳面な性格だったので、俳諧・心学・易学はもちろん、農事・神社仏閣・祭礼・旅日記・民俗・商業上の覚えなど、生活上のあらゆる分野の記録を正確詳細に書き留めています。これが、現存する酒井家文書の中核をなしています。公の文書を筆写したのではなく、一庶民の生活記録という点が何よりの特徴です。何かと窮屈な江戸期に県西部の一隅で、毎日を精一杯生き、楽しんで一商人の生き様が目に浮かんできます。

弥蔵夫婦は子どもに恵まれなかったため、近所の大坂悦蔵と養子縁組し、悦蔵親子三人が酒井家を継ぎました。

悦蔵の後継者が茂八で、明治四十年前後に清国に渡り、昭和十八年に大連市で没しました。茂八の子どもが武彦と鎮男で、二家族とも戦後半田町に引き揚げ、小野の実家で再出発することになりました。

昭和四十五年、国道工事のため、弥蔵の生家は取り壊されました。こうした際、古文書類は処分される例が多いのですが、武彦らの高い見識により、酒井家文書は全く処分されることがなく移送されました。昭和四十九年から始まった『半田町誌』全三巻の編集には、この文書群が大きな役割を果たしています。

酒井家文書は寄託された文書と、福山市の酒井一字氏所蔵文書の両者で全体を構成します。



酒井家累代墓と明治十五年に弥蔵が建立した「光明真言二百萬遍供養塔」。墓地は半田盆地を一望に見渡せる見性寺境内にあります。



# 展示にあたって

今回の企画展示「江戸時代人の楽しみ」は、一軒の家に保存された史料をもとに、当時の庶民の娯楽であった旅・俳句・芝居見物などの様子をうかがうものであります。またこの展示は半田町の酒井家文書の総合調査中間報告をも兼ねています。

江戸時代の半田村は、阿波における商業の中心地の一つとして栄えました。多くの半田商人の中で、酒井家は飛び抜けた大商人というわけではありませんが、幕末期の当主弥蔵が大変に興味の広い人で、また好奇心が強かったために、商業史料のほかに膨大な庶民史料を残しています。

俳句・心学・歌舞伎・お陰参り・書画などに関心を持ち、自らも参加したり、資料を集めたりしています。また自分が行った数々の旅行を克明に記録しています。

こうした江戸時代の庶民の生活と楽しみをうかがうことのできる酒井家文書は、いま文書館と子孫の自宅とに分散して保存されています。

史料保存の原則からすれば、史料はできるだけ一括するのが望ましいので、本館では自宅保存分に関してはマイクロ撮影をし、これを機会に酒井家文書の全容を知るため、外部の専門家を含む総合調査委員会を平成七、八年度にわたって発足させました。

調査委員会には、大きく二つのテーマを設定しました。一つは史料内容の調査で、これは外部の委員を中心に行われるものであります。他のテーマは、文書館の職員が担当する史料の保存状況、さらに今後の保存方法などを、調査・研究するものであります。後者のテーマには、当然ながら「調査による史料劣化の防止」の課題も含まれています。

委員会は、四国大学の白井宏先生に委員長をお願いし、他の委員には、桑原恵、佐藤武、佐藤義勝、篠原俊次、真貝宣光、富久和代、名倉佳之の諸先生方に依頼いたしました。それに本館の古文書係が参画しております。

平成八年度末には調査結果をまとめますが、今回の展示はその中間報告の形で、委員の先生方には図録の原稿もお願いいたしました。また展示説明は、先生方の原稿をもとにして本館で作製したものであります。

展示に当たり、全面的に協力していただいた調査委員会の諸先生方、史料の調査・展示を快諾していただいた所有者の酒井一字氏を初め、先祖の史料を大切に保存されてきた酒井家代々の皆さんに対し心から感謝を申し上げます。

平成八年一月三十日

徳島県立文書館館長

大 和 武 生

## 酒井家文書

### について

酒井家文書は、美馬郡半田村の一地方商人の家に残された数千点におよぶ、江戸時代後期から明治期にかけての庶民資料である。なかでも幕末維新期に活躍した弥蔵は、メモ魔ともいえるほどこまめに日常生活や文化活動の記録を残しており、これが文書群の中核をしめている。

酒井家文書の存在は早くから注目されており、昭和五十六年に刊行された『半田町誌』には俳句や心学、「ええじゃないか」関係の史料が数多く紹介されている。この時には半田寛氏により「史料目録」(稿本)が作成されている。その後史料群の一部は、酒井家の現当主酒井一字氏の在住する福山市に移されたが、残りは半田町の酒井家旧宅に保管された。このため史料保存の観点からは、散逸や破損など安全な保管が懸念されていた。

本館では、半田町のご協力もいただき、平成五年四月、半田町の酒井家旧宅の資料十二箱をお預かりすることになった。資料はくんじょう処置をほどこした後、一点ずつ整理をはじめた。仮目録ができたのは約半年後の平成六年七月末で、史料総点数一、八〇三点となった。なお、原型保存の観点から箱別に整理したが、箱には次のような簡単な分類が施されていた。

- 一、旅日記、神社仏閣参詣記、宗教等 一五二点
- 二、芝居、浄瑠璃本等 六九点
- 三、長州征伐、異国船来航騒動記等 八五五点
- 四、俳句、和歌等 九一点
- 五、俳句、和歌等 一四三三点
- 六、易、曆、心学等 一五二点
- 七、雑(歴史等) 一一〇点
- 八、易、曆、心学等 八〇点
- 九、俳句、和歌等 一二六六點
- 一〇、俳句、和歌等 三〇七點
- 一一、雑(番付、教科書等) 二一四點
- 一二、雑 一七四點

福山市の酒井家に保存されていた分については順次借り出しをし、マイクロフィルムに撮影する一方、現在整理作業をおこなっている。

〈文・立石恵嗣〉



酒井家文書(福山市酒井家保管分)



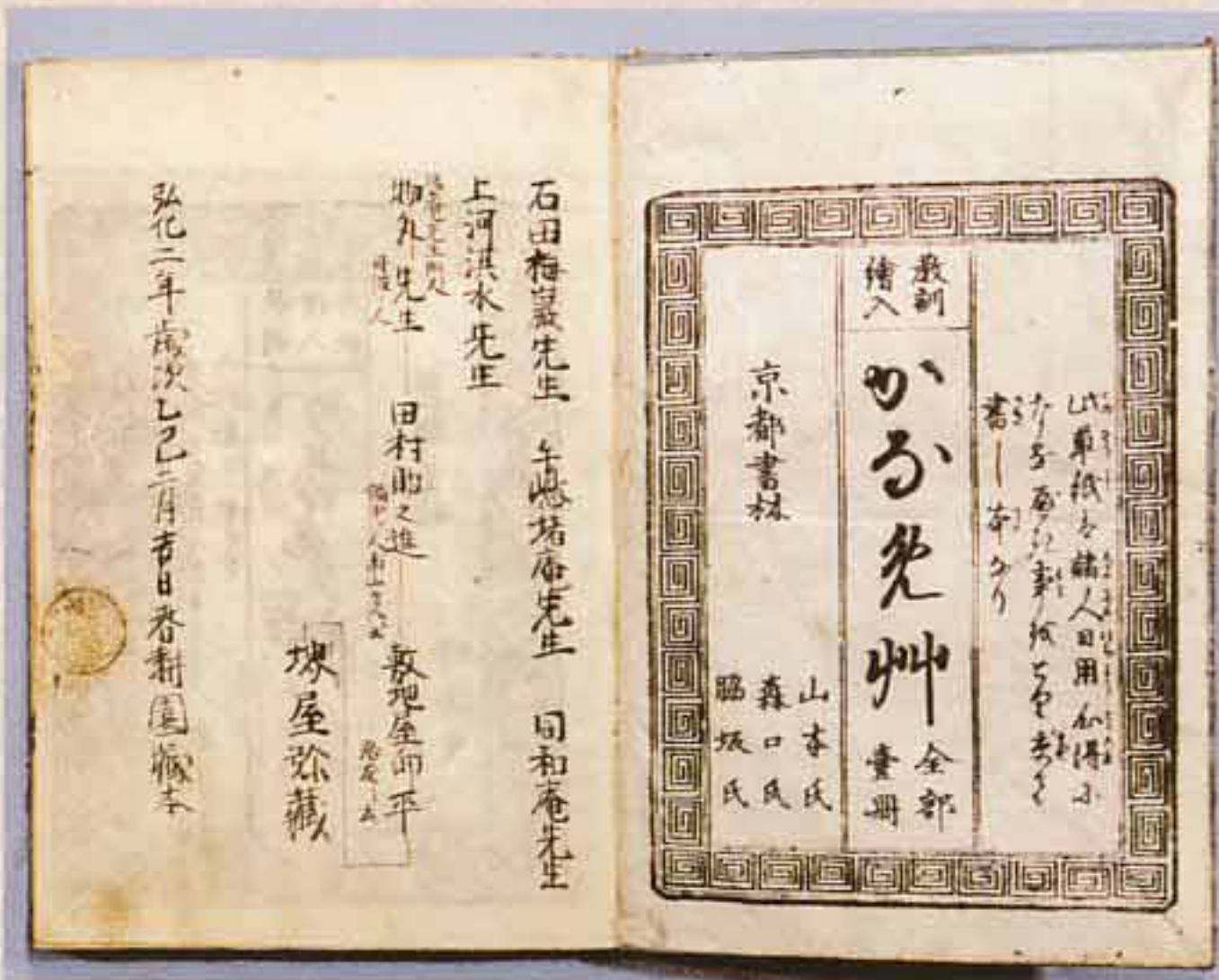
會友大旨

〔會友大旨〕手島堵庵著 敷太家文書・脇町高校歴史史料館



『心学御題控』弥蔵が筆記した心学問答の抜き書き

寛政五年五月、手島堵庵の許可を得て諸邦に教諭した、紀州和歌山の修敬舎の上田唯今（中沢道二に初入）が来講して、入門者が百人に及び、山崎宗暉は徳島に益堂を創設した。同年秋には、唯今が再来し、撫養に學半舎、徳島に尊性舎（益堂を改称、文化末年には性善舎と改称す）が設営された。以上上田唯今は年々二回ずつ来講、寛政九年には上河淇水（愿蔵）も来徳している。



『かなめ草』

※右写真の学統系図の墨書より  
 石田梅巖先生（蘆平）  
 石田梅巖先生（蘆平）  
 手島堵庵先生（左衛門）  
 同 和庵先生（庄兵衛）  
 上河淇水先生（庄兵衛）  
 物外先生（助之進）  
 敷地屋卯平先生（助之進）  
 田村先生（助之進）  
 路友先生（助之進）

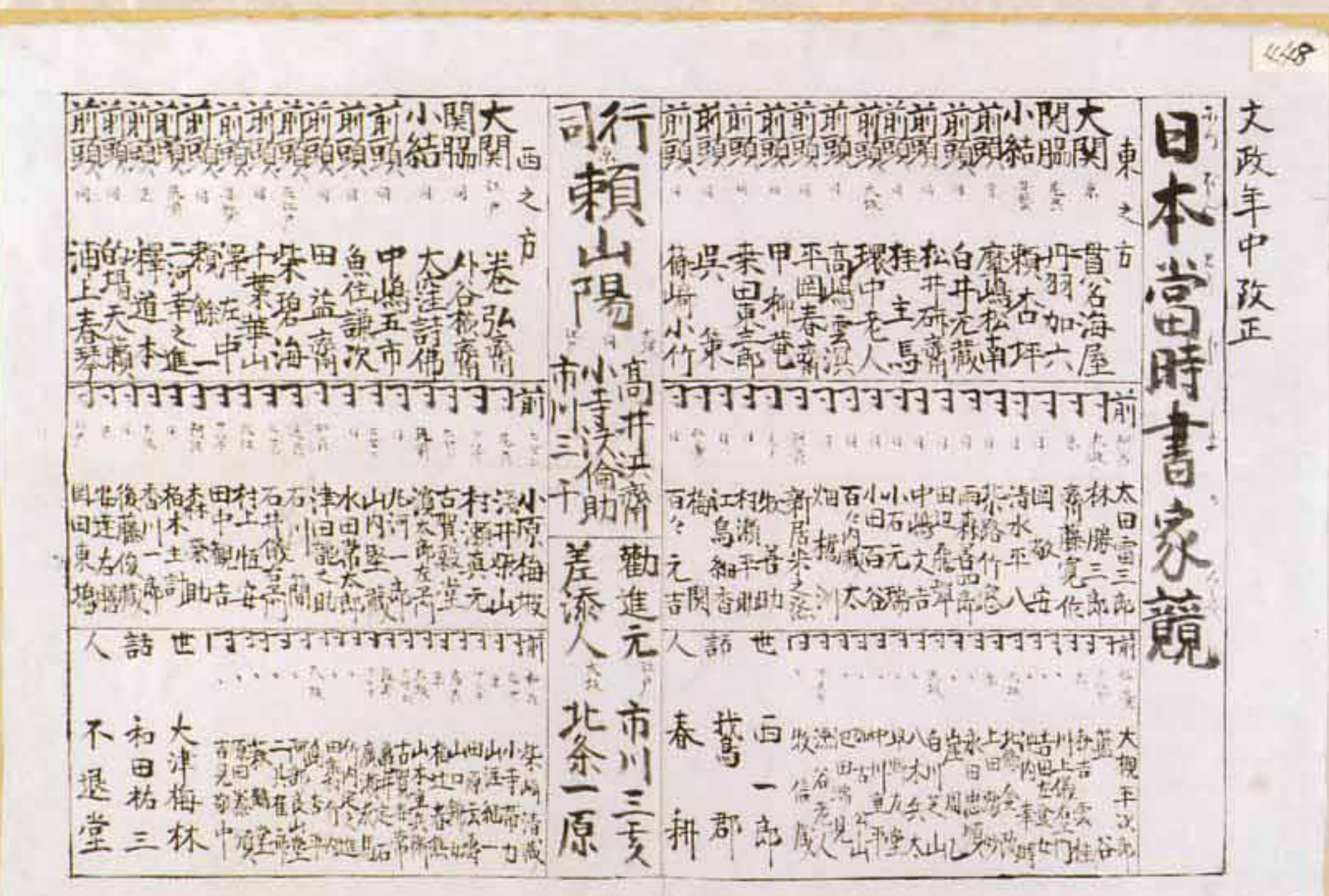
阿波の書家

〔文・富久和代〕

弥蔵直筆、全国の書家番付けの写しであろうと思われる。極めて丹念で緻密な弥蔵の性格がよく現れた書き物である。東大関は京都在住の貫名海屋（阿波の生まれ）、西大関に江戸の巻弘齋（菱湖）。行司は頼山陽、勸進元は市川三亥（米菴）。阿波の書家として、太田需三郎（表中の雷は誤りか）、新居米之丞（蒸）（号は春洋、新居水竹の父）、森榮助（名は直、字は子温、号は盈科）が登場している。

文化二乙丑年（一八〇五）二月、徳島藩では三番目の心学饗舎・根心舎が、多くの社友の献身的な協力により、木ノ内（現役場前）に造立された。舎號は、『孟子』の「告子」篇「君子の性とする所は、仁・義・礼・智、心に根さす」からの命名である。前掲『根心舎夜驚』によると、この時三十二名の出銀者名簿が添付されているが、十六名が上田唯今への初入、十五名が田村祐之進への初入、敷地

近世半田村における石門心学の先賢達の足跡を回顧するとき、その熱き息吹が今も偲ばれるほど、その学恩は広くて深いものがある。





# 半田と商人弥蔵

あきんど

〈文・真貝宣光〉

耕地面積に比し家数がありに多く百姓での生計が成り立ち難いという経済的条件と、吉野川の船運により撫養・徳島―半田―祖谷を結ぶ物資の集散地に位置するという地理的条件は、半田に多くの商人を輩出し、吉野川中流域の商都として機能した最大の理由であろう。

明治十七年に、吉野川調査のため本県を訪れたオランダ人工師デ・レーケは、池田より下流での主要な川港は半田・貞光・辻町・脇町・岩津・川島・第十の七カ所であると記している。水運が物流の動脈であった時代、半田小野浜は出船入船で賑わったことであろう。佐古七丁目の町人堺屋吉左衛門の嫡子太兵衛が、薪を仕入れ徳島に運送するため小野浜に店を開いたのは元禄十五(一七〇二)年である。物資の中継地である半田に注目しての開業であったと考えられる。

半田は商都として栄えたが、大久保系・木

村系という二系統の商人群が存在した。大久保系は藩政中期頃、木村系は藩政後期頃から台頭し、漆器・質・酒造・油締・米穀等の主要商品を取り扱い、半田経済界はこの二系統の商家の寡占状態にあったといえる。それは明治元(一八六八)年九月に藩が市郷富氏に下令した調達金の高額負担者が両系統の商人で占められていることから明らかである。

堺屋はこの系統の何れにも属さない半田商人であり、経営規模、取扱商品の多様さから村の雑貨商と言えらる。「酒井家文書」には堺屋六代目の当主弥蔵が、嘉永三(一八五〇)年から明治四(一八七一)年に記録した「大福帳」が含まれている。

徳島での経営史的研究は徳島を代表する藍商に限ってなされて来た傾向が強い。酒井家の「大福帳」を集計・分析することによって吉野川水運と関わる「雑貨商人」の経営実態を解明する格好の史料となるだろう。



弥蔵が商売で使った大福帳

◆調達金引請高(明治元年九月) ※(内は美馬郡中順位)

小高取	大久保弁之助	五百両(二位)
小高取	木村惣兵衛	二百五十両(五位)
無役人	大久保嘉久郎	二百両(六位)
無役人	木村金蔵	五十両
小高取小家	大久保虎平	四十両
御敷御番人	大久保市郎右衛門	四十両

# 半田の石門心学

〈文・名倉佳之〉

石門心学の祖・石田梅岩が京都車屋町御池上ルで、庶民教化のために無料で講席を開いたのは、享保十四年(一七二九)であった。以後手島堵庵が規約を制定してその教化活動の拠点とするため、天明二年(一七八二)に創設した明倫舎を中心に、全国に普及していった。

寛政期(一七八九―一八〇〇)は、京都では明倫舎三世の上河洪水、江戸では参前舎の中沢道二らが活躍する石門心学の普及史上の黄金時代であり、徳島藩における石門心学の勃興期でもある。

「根心舎 夜驚」(敷太家文書・県立文書館)によると、半田村においては寛政五年(一七九三)、庄屋・篠原長久郎(蒼山)が大坂の中井典信(石門心学二世手島堵庵の弟子)に初入したのが心学導入の端緒となった。以来、盛衰はあったが、撫養・里見平兵衛(上田翁初入)、南方・林喜十郎(手島先生直弟)、前掲の上田唯今、桑原源兵衛(冬夏、貞光村出身)及び田村祐之進(備中の人で南山々人と号す、丹波・伝習舎舎主谷川物外の門人)が相

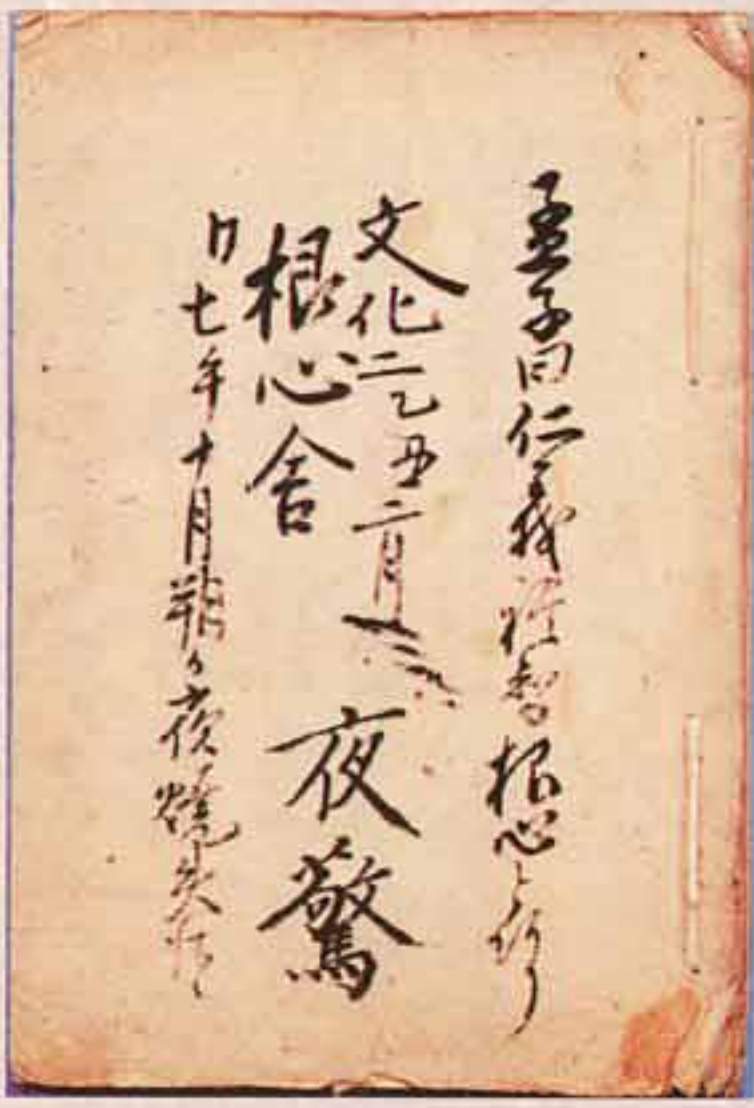
次いで来村した。

屋太兵衛は中沢道二への初入である。半田村の心学社中の拠り所であった根心舎は、文化七年十月朔日夜焼失した。

文政以降については、村外からの講師の来入はなかったようで、祐之進から講師を認可された路友(敷地屋卯平)ら地元先の先輩達を中心として、修行が続けられたものと思われるが、天保三辰年(一八三二)の路友没後は、その門弟・堺屋弥蔵、敷地屋兵助、大久保熊三郎等によって師の石碑造立とともに、学統の灯火は糸筋の如く継承されていくのである。



吉野川の川港 半田小野浜



「根心舎 夜驚」(敷太家文書・県立文書館)







# 江戸時代の俳諧

〈文・白井 宏〉

## 酒井弥蔵(春耕園農圃)と近世後期の俳壇状況

芭蕉ははるかに遠く、文字通り人格化され(天保十四年の百五十回忌には、鳳朗の請いにより二条家から芭蕉に「花下大明神」の神号が授けられている)、蕪村を中心とした中興期の運動も終息した時期から、明治の子規による俳句革新運動に至る期間が、弥蔵の生きた時代である。

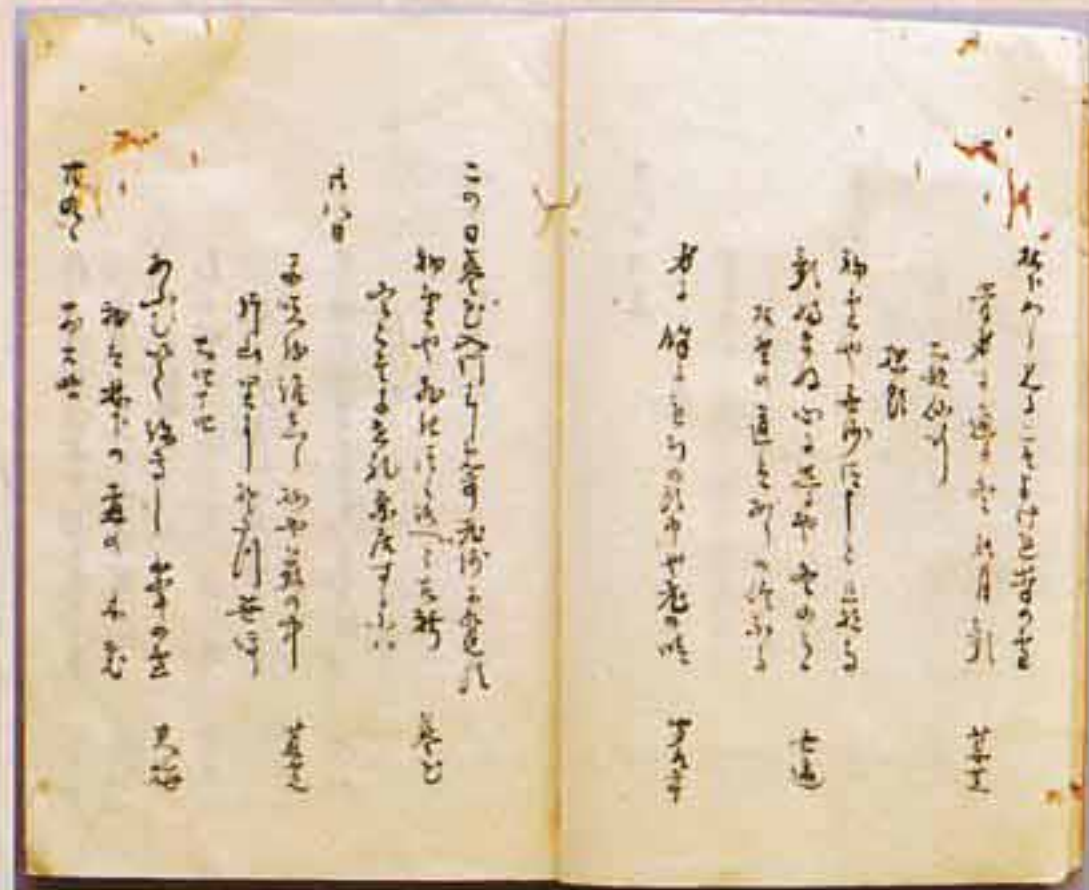
弥蔵の俳諧活動が記録に現れ始めるのは、天保の初年で、この時期「二八三〇(天保元)年〜一八四三(天保十四)年」はいわゆる「天保の俗調」と呼ばれるやや停滞の時期である。停滞は、一面で大衆化の時期でもあり、一八三六(天保七)年惟草編『俳諧人名録』初編の刊行や、一八三八(天保九)年春明編『誹家大系図』の刊行等は、諸国の俳人相互の盛んな往来風交が、その種のいわば「俳壇情報」的資料の需要を生んできたことを物語っている。

1783(天明3)年	芭蕉九十回忌	
	蕪村没(68歳)	
1793(寛政5)年	芭蕉百回忌	各
	地で盛んに	行
		れる
1808(文化5)年4月20日	弥蔵生	
1827(文政10)年	一茶没(65歳)	
1843(天保14)年	芭蕉百五十回忌	
1892(明治25)年3月3日	弥蔵没(85歳)	
同年 6/26~10/2	正岡子規	
	『日本』に「蕪	
	祭書屋俳話」	

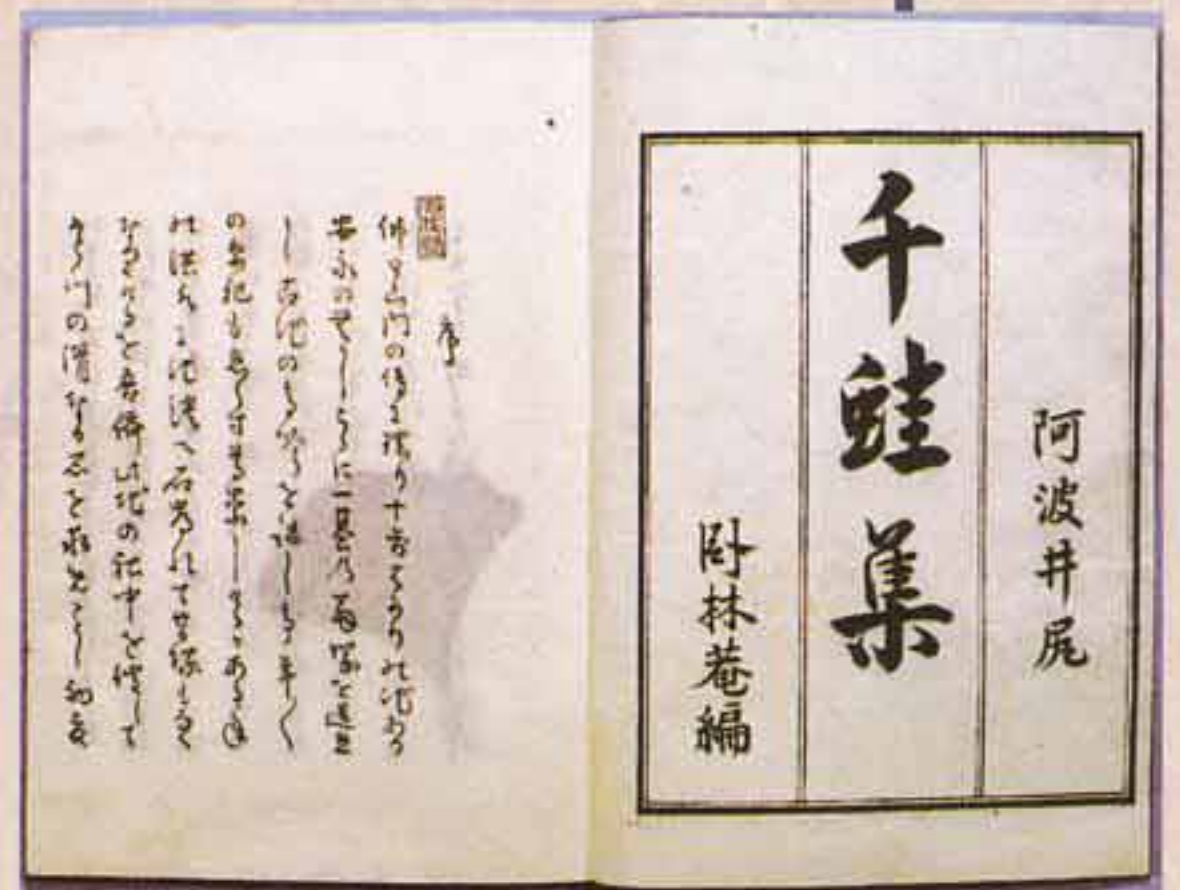
## 俳人の往来風交

俳人と旅は、芭蕉以来切っても切れぬものだが、「座の文学」という俳諧の特性から考えると、いくらか出版文化が盛んになっても、諸国の俳人が往来し、直接指導し、あるいは

俳席を共にするということは、俳諧の伝播普及にとって必要不可欠のことであった。阿波の多くの俳人も諸国へ出かけており、また多くの俳人を阿波に迎えてもいる。農圃(弥蔵)も、職業俳人ではないが、よく旅をし、句を詠んでいる。



①『阿波国正風年譜』  
寛政6年11月27日の項(県立図書館蔵)



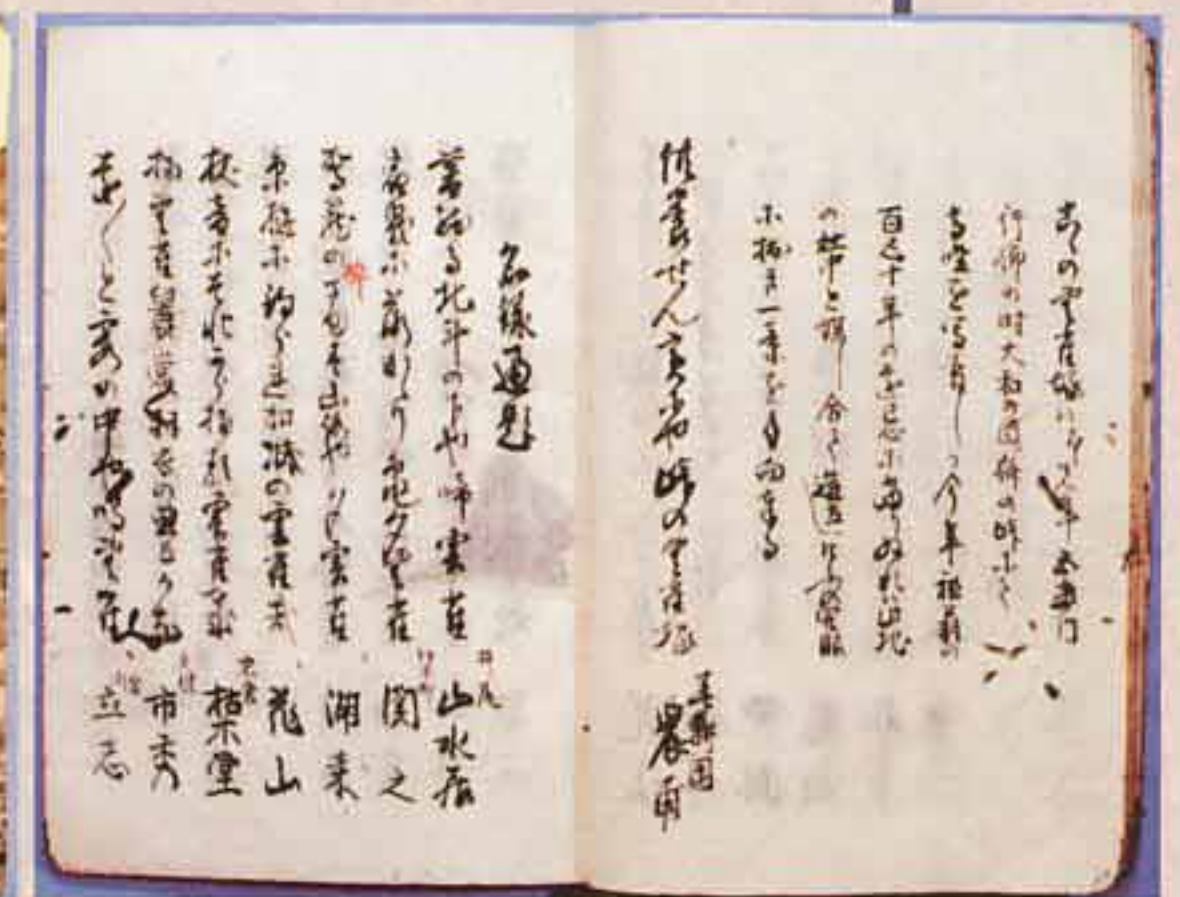
②『千蛙集』(酒井家文書2-1)



③平生社編『七種供』  
(酒井家文書2-10)



④芭蕉句碑建立、記念句集『雲雀集』(酒井家文書4-74)



## 半田水音分社歴代分社長一覧

代	雅号	氏名	生没年
一世	楊柳園 梅室	祖父江多賀之助	宝暦2(1752)~文化4(1807)[56]
二世	孤竹庵 梅雅	木村 由蔵	明和8(1771)~嘉永6(1853)[83]
三世	竹亭 歩雪	三宅 熊三朗	寛政10(1798)~安政5(1858)[61]
四世	一溪庵 森々	木村 貞右衛門	寛政11(1799)~文久2(1862)[64]
五世	豊秋庵 竹雅	木村 金蔵	文化2(1805)~明治11(1878)[74]
六世	漂雲閣 遊仏	佐伯 道明	嘉永元(1848)~明治19(1886)[39]
七世	根心舎 如跡	木村 新蔵	文政2(1819)~明治28(1895)[77]
八世	養四軒 斤士	大島 関蔵	文政8(1825)~明治28(1895)[71]
九世	娛水庵 苺谷	木村 新吉	天保2(1831)~大正6(1917)[87]
十世	養志軒 芹影	大島 由太郎	万延元(1860)~昭和17(1942)[83]
十一世	幽谷庵 蘭翠	峰坂 佐馬之助	明治11(1878)~昭和24(1949)[72]
十二世	竹亭 歩雪	三宅 平八	万延元(1860)~昭和20(1945)[86]
十三世	行雲亭 露蛸	田村 哲一	明治21(1888)~昭和40(1965)[78]

※ ( )内は西暦/[ ]内は没年齢で数え年

## 阿波の俳壇状況 (半田に重点を置いて)

1788(天明8)年	阿波美濃派の祖柿原の機因、讃岐に客死(42歳)
1794(寛政6)年	徳島の小春園蓼花、美濃派に入門(写真①)
文化初年	半田村に美濃水音社の分社成立
1827(文政10)年	臥林菴蘭室『千蛙集』刊行(写真②)
1836(天保7)年	平生社編『七種供』刊行(写真③)
1840(天保11)年	徳島の蓼花没(71歳)
1842(天保13)年	大里の其雪没(55歳)
1843(天保14)年	峠庵に芭蕉句碑建立、記念句集『雲雀集』成る(写真④)



寛政八年（一七九六）七月二十五日より大坂藤川座（角の芝居）で初演された「伊勢音頭戀寝釵」である。中でも「伽羅先代萩」「伊勢音頭戀寝釵（いせおんどこのねたば）」のような後世に残る名作の初演に立ち会っているのは注目に値する。

「大坂芝居画本」は芝居番付のなかでも絵番付と呼ばれるもの。寛保二年ごろから明治中期くらいまで三都の芝居茶屋で発行され、内容は序幕から大詰めまで各場面の見せ場を絵入りで紹介したもので、いまの筋書き・パンフレットの前身である。ここに紹介したのは、天保十二年八月五日から大坂市川座（大西芝居）で興行された「仮名手本忠臣蔵・菅原伝授手習鑑」。角書きに「校合」とあり、また外題名の下に「右狂言裏表二致し十一段二仕組御覧二入奉候」とあり、尾上菊五郎が両狂言の主だった七役を勤めているところから、両狂言を裏表とし、交互に演じたものかもしれない。なお調査する必要がある。

弥蔵の残した記録は、地元半田、貞光、脇町、あるいは金毘羅で興行された芝居、人形浄瑠璃が中心となっている。弥蔵は単に日記風に記録するのでは満足せず、



「伊勢音頭戀寝釵」芝居番付



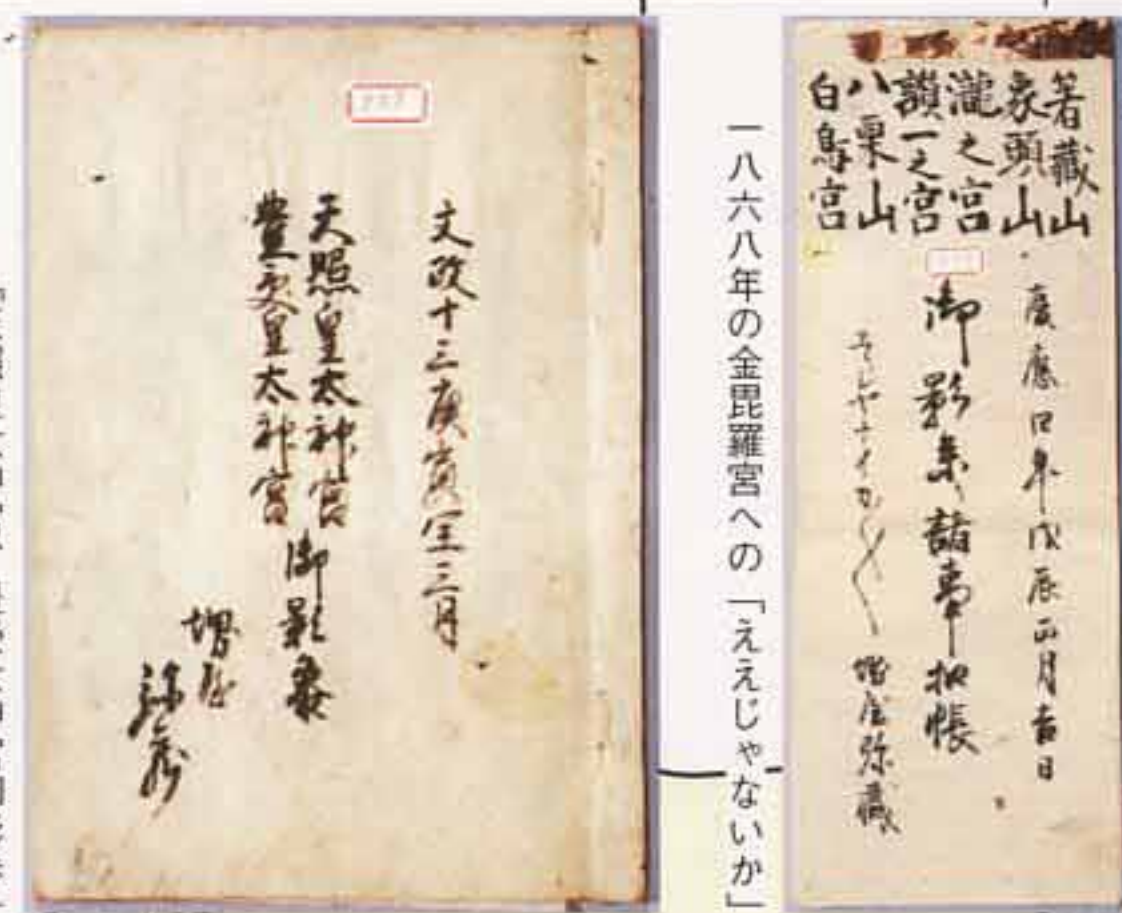
弥蔵の手による芝居の記録

芝居番付の形式を模し、外題名、座元、役名、役者名は言うに及ばず、時には芝居絵を切り張りし、また口上はその文句から役者の姿まで克明に記録しており、氏の記録魔としての面目躍如たるものがある。これらの史料により、幕末から明治初期における徳島県西部の芝居興行の事情がかなり詳細に判明してくるものと思われる。



「仮名手本忠臣蔵・菅原伝授手習鑑」大坂芝居画本

江戸時代人の楽しみ・観劇／信仰



文政13年 堺屋弥蔵のお蔭参り行程図

- ：宿泊地
- 青字：日付
- 青○数字：参宮人数

<作図／茨木 啓子>



# 歌舞伎・人形浄瑠璃

〈文・佐藤 武〉

酒井家文書の中には武助、弥蔵父子が二代にわたって収集・記録した約七十点ほどの芝居・浄瑠璃関係の文書が含まれている。この七十という数え方は、例えば一冊に綴じられた芝居番付も一点として数えているので、実際の点数はそれをはるかに上回るものと見られる。これらの文書からみると、武助、弥蔵親子はかなりの芝居好きだったものと思われる。その中から一部紹介しよう。

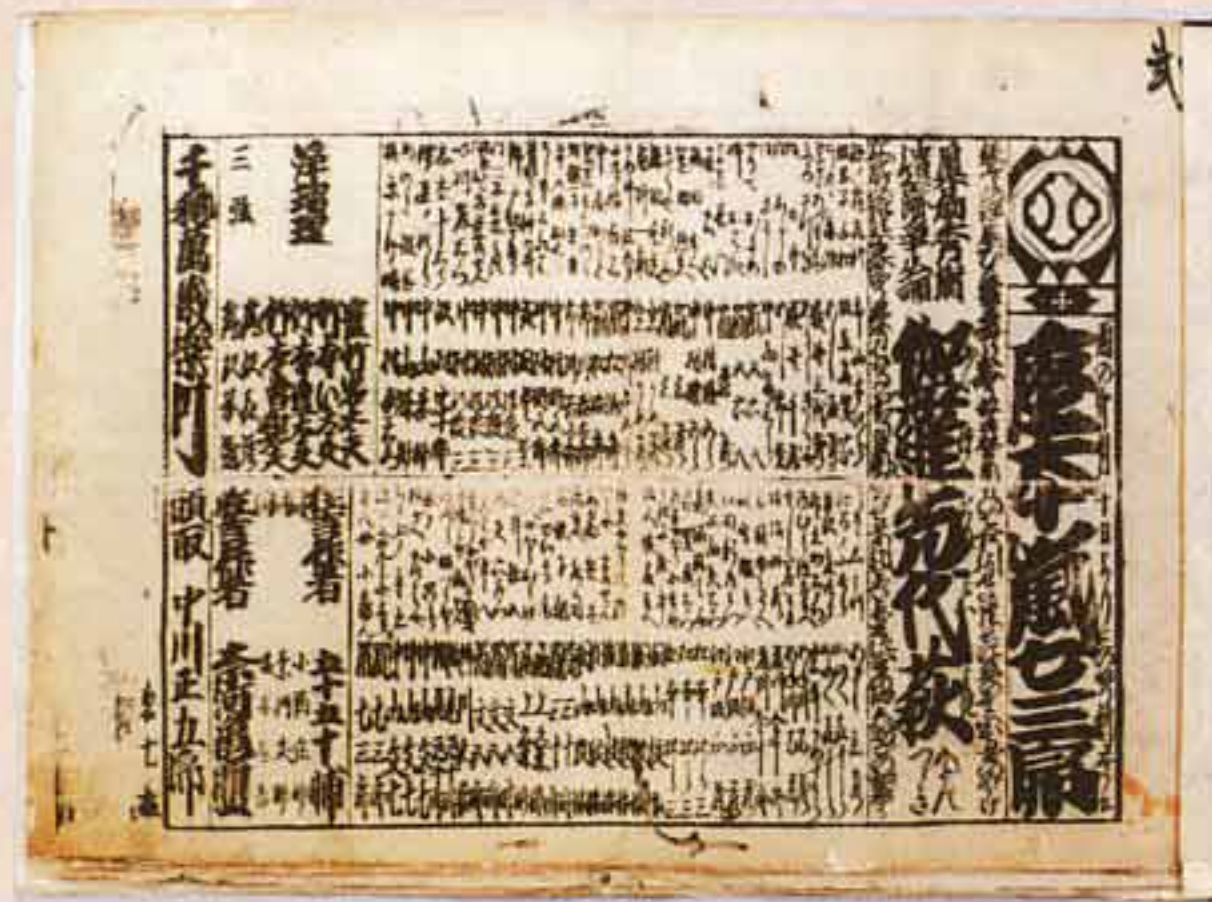
まず、表紙に使った芝居絵は「夏祭浪花鑑」七段目「長町裏」の場。右肩に「団七九郎兵衛 坂東三津五郎、三河屋儀平二、片岡市蔵」とあり、この組み合わせは天保四年（一八三三）五月十三日より江戸市村座で二番目狂言として演じられたものである。この狂言に関しては当文書の中にもう一点番付が残されている。日付と役者の組み合わせから天明四年（一

七八四）五月二十六日から大坂藤川座（角の芝居）で興行されたものである。年代からみて、前者は武助か、弥蔵が大坂あたりで買ったもの、後者は武助が大坂で見物した折り入手したものであろう。

武助が収集したと思われる芝居番付の中には初演時のものが数点含まれており注目される。年代順に挙げると、安永六年（一七七七）四月十六日より、大坂嵐座（中の芝居）で初演された「伽羅先代萩」、安永九年（一七八〇）十二月八日より大坂芳澤座（角の芝居）で初演された「帰命曲輪障（あなかしこくるわぶんしょう）」、天明元年（一七八一）五月二十二日より大坂藤川座（大西芝居）で初演された「時今五月再興（ときはいまさつきこのさいこう）」、寛政二年（一七九〇）二月、大坂中山一徳座（角の芝居）で初演された「けいせい誰伏水（けいせいいたれとふしみ）」、



「夏祭浪花鑑」芝居番付



「伽羅先代萩」芝居番付

## 文政十三年 お蔭参り 慶応四年 ええじゃないか

〈文・桑原 恵〉

「お蔭参り」は、民衆の伊勢信仰にその起源が求められ、古くは元寇の後の二一八七年（弘安十）に集団的な伊勢参宮が起こったことが知られている。江戸時代になっては、一六五〇年（慶安三）に初めての「お蔭参り」が起こり、一八六七年（慶応三）まで、合計七回起こっている。最後のものは「ええじゃないか」として知られているものである。阿波との関連でみると、江戸時代に入ってから五回目の「お蔭参り」となる一七七一年（明和八）の大規模なお蔭参りには、一七七日目に阿波にその影響が現れていることが知られている。また、一八三〇年（文政十三）の「お蔭参り」は阿波から始まったことが多くの書に示される、それまでの近畿地方から始まった「お蔭参り」とは始まりが異なっていることが知られている。

「お蔭参り」の始まりには神意現象のような不思議なことが起こることが関わっているといわれるが、この「お蔭参り」では、佐古の手習い屋の子どもたちが伊勢参宮をしたいと言いついたことが始まりとされている。しかし、これらのことは、「お蔭参り」のようすを見聞した「聞き書き」の形式の史料からいわれているもので、その意味では、「お蔭参り」の参加者も第三者的な視点から眺めたものであるということができる。

今回展示している酒井家文書の史料は、その「お蔭参り」に酒井家の当主弥蔵が参加し、その記録を残しているもので、興味深いものである。この「お蔭参り」への参加は、弥蔵が二十三才の時、三月二十七日の夜に、近隣に住む瀧蔵や広吉たちと出発し、伊勢参宮までの間に阿波の人たちと出会い、別れて、閏三月二十日に帰宅するまでの記録である。また、酒井家文書には、よく知られている一八六七年（慶応三）の「ええじゃないか」とは異なる「ええじゃないか」の記録がある。これは、戊辰戦争直後に、

彼が金比羅宮へ、仲間とともに「ええじゃないか」の踊りを踊りながら旅をし帰宅した記録で、よくいわれる民衆の変革への予兆としての「ええじゃないか」とは少々趣の異なるものであり、興味深い史料である。これらの酒井家文書の史料は参加者としての記録であることにとくにその重要性がある。



「歌川豊国のお蔭参りの図」



## 弥蔵の残した旅日記一覧

標 題	出 発 日	帰 宅 日	旅 行 の 目 的	主 な 旅 行 先	同 行 人	史料番号
見る若葉聞く郭公旅日記	天保12年3月晦日	4月4日	善通寺御開帳の見物	讃岐 善通寺 金比羅 本山寺等	妻・姉	サカ100081
見る青葉聞く郭公旅日記	天保14年5月24日	5月29日	石鎚山の参詣	伊豫 三島明神 前神寺 石鎚山等	半田村3名・毛田村1名	サカ100082
弘化二年乙巳春中旅日記	弘化2年正月29日	2月2日	金比羅宮等の参詣	讃岐 善通寺 金比羅 本山寺等		サカ100083
仏生会卯の花衣旅日記	弘化3年4月9日	4月11日	法然寺後開帳の見物	讃岐 金比羅 法然寺等		サカ100084
散る花の雪の旅日記	弘化3年3月19日	3月22日	善通寺百味講に出席	讃岐 善通寺	半田村百味講中11名	サカ100085
出向ふ雲の花の旅日記	嘉永2年3月11日	4月3日	出雲杵築大社の神代神楽見物	出雲 出雲杵築大社	掛連22名	サカ100086
旅日記法農桜	嘉永3年3月18日	3月22日	善通寺百味講に出席	伊豫 三島明神 讃岐 善通寺等	半田村1名	サカ100087
極楽花の旅日記	嘉永4年3月20日	3月25日	正御陰供につき善通寺参詣	讃岐 善通寺 東讃の諸寺		サカ100088
梅の花見の旅日記	嘉永5年2月24日	2月28日	讃岐天満宮大曼陀羅供の見物	讃岐 天満宮等	半田村2名	サカ100080
さくら卯の花旅日記	安政5年3月24日	4月15日	阿淡両国霊場巡り	四国霊場88ヶ所の内阿波23箇所等		サカ100254
慶応二丙子年十一月南方旅日記	慶応2年11月12日	11月28日	敷地屋兵助に雇われ目薬入れ替え	日和佐・由岐・富岡等		サカ100283
豫州旅日記	明治元年12月4日	12月19日	敷地屋兵助に雇われ目薬入れ替え	伊豫 今治・西条・小松等		サカ100282

## 弥蔵の旅

旅は最高の娯楽である。初めてのものを見聞きし、そのところの食を味わう。

多くの路銀を遣い、多くの時間を費やす。それでも江戸時代人酒井弥蔵は旅に出た。それもほぼ毎年である。

無事帰郷した後「旅日記」を編纂する。他人に見せるための「旅日記」である。使用した路銀を事細かに記す。後に続く人への便利を考へて、商人としての弥蔵の顔が覗く。旅行中の感想を文章だけでなく俳句に託す。芭蕉へのあこがれ、趣味人としての弥蔵の顔である。旅行中真言を唱えた回数を書く。旅行中の無事を祈ったのか、信心としてなのか。

「見る青葉聞く郭公旅日記」をもとに、弥蔵と伊豫の石鎚山まで旅を試みよう。天保十四年五月二十四日、川野屋瀧之介、大泉利三郎、大道芳介の三人と誘い合わせ、卯の刻(朝六時頃)出立。隣の毛田村で中島常次が加わり一行五人で西へと向かう。途中雨には降



- 見る若葉聞く郭公旅日記 天保12年3月晦日～4月4日
- 見る青葉聞く郭公旅日記 天保14年5月24日～5月29日
- 出向ふ雲の花の旅日記 嘉永2年3月11日～4月3日

られたが、番所で出国の手続きをして阿波・伊豫の国境を越える。国境の峠で一句「峯高しこころで聞かせホトトギス」。

伊豫三島の近く上分村で一泊し更に西へ、土井村の栄松を見て一句「青々と色増す松や五月雨」。この日は石鎚山の麓、大町で泊まることを決め近くの西条城下を見物する。

あくる日ついに石鎚参詣である。山先達につれられて修験の山石鎚山、道も次第に狭く険しくなっていく。「梅雨空を突き抜く法螺の声高し」。さらに登っていくと、岩にかかった鎖をたどって登るほどになる。その鎖を登るのに、今宮の山先達に鎖料を支払うことになる。ついに登り切り一句「登り得て海にいきつく夏の峯」。土産としてお守り十七枚、薬四十服を買って家路についた。

最後に銀二十三匁四厘の路銀の決算と旅行中光明真言六百遍唱えたことを記して旅行記を閉じている。

弥蔵はこうした参詣・見物の旅を繰り返した。その旅先は、西日本一帯に広がっている。江戸時代は、庶民が楽しみのために旅することができた時代だったのである。



# 弥蔵と旅







## 酒井家文書展示目録

寸法：cm

### 【俳句】

雲雀集	天保14年3月	24×17	サカイ00381
七種供	天保7年2月	23×16	サカイ00162
千蛙集	文政10年4月	23×16	サカイ00153
冠上発句集 他8冊	明治13年4月	16×14	サカイ00901
風流有点心覚 一他9冊	文政9年12月	17×12	サカイ00931
辻 三評角力集之一	近 世	21×29	サカイ01140
阿讃発句集大相撲鏡行司三評	安政6年5月	72×48	サカイ01142
俳諧江戸風流 全	近 世	23×16	サカイ00316
秋月興催	天明3年	16×25	サカイ00421
俳諧雑記全 卷一他11冊	天保5年1月	17×13	サカイ00964

### 【旅日記】

出向ふ雲の花の旅	嘉永2年2月	12×17	サカイ00086
見る若葉聞く郭公旅日記	天保12年3月	12×17	サカイ00081
見る青葉聞く郭公旅日記	天保14年6月	12×17	サカイ00082
仏生会卯の花衣旅日記	弘化3年4月	12×17	サカイ00084
散る花の雪の旅日記	弘化4年3月	12×18	サカイ00085
梅の花見の旅日記	嘉永5年2月	12×17	サカイ00080

### 【おかげまいり】

おかげ百人一首	文政13年閏3月	17×12	サカイ00956
御影参り諸事扣帳	慶応4年1月	12×34	サカイ00459
おかげ参り心得	文政13年3月	24×33	サカイ00460
天照皇太神宮豊受皇太神宮御影参	文政13年閏3月	25×17	サカイ00039

### 【芝居】

座本 豊竹氏吉	寛政3年2月	25×35	サカイ00198
座本 中村久太夫	文政9年3月	25×17	サカイ00181
大坂芝居画本	近 世	20×14	サカイ00169
所々ニ而見物狂言芝居番付	文政2年～	25×18	サカイ00176
日本第一大操本大山吉五郎	明治9年11月	24×17	サカイ00183

### 【心学】

心学古先生碑名写	嘉永1年9月	24×17	サカイ00149
心学御題控 卷一他4冊	文政11年11月	25×17	サカイ00145
路友先生石碑造立控	弘化3年2月	24×17	サカイ00150
やしなひ草 上下	天明4年	22×16	サカイ01463

### 【その他】

日本當時書家鏡(写)	近 世	33×49	サカイ00264
船手上下諸運賃扣之帳	宝暦7年7月	24×17	サカイ00276

印

刷

原田印刷出版株式会社

〒170 徳島市西天工町四ノ五  
電話 〇八八六二二三三五六

編集・発行

徳島県立文書館

〒770 徳島市八万町向寺山  
電話 〇八八六二六八三七〇〇

第十二回企画展  
江戸時代人の楽しみ  
—旅・俳句・芝居—

平成八年一月三十日発行